キク圃場において葉裏への薬剤の付着程度がクロゲハナアザミウマの防除効果に及ぼす影響

貴島圭介・金城聖良・喜久村智子（沖縄農研セ）

1．背景・目的

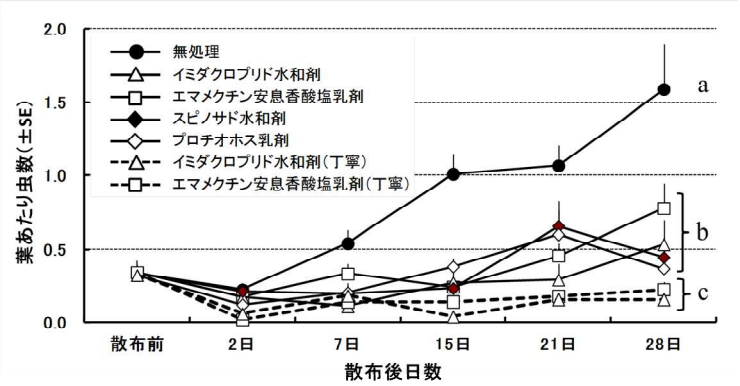
クロゲハナアザミウマ *Thrips nigropilosus* は，沖縄の栽培キクにおける最優占種で葉に被害を及ぼす主要害虫である（Ganaha-Kikumura et al., 2012）。本種はこれまで害虫化している例がほとんどなかったため，薬剤の効果に関する情報はごく限られていた。しかし，近年，室内試験において散布薬剤の効果が調査され，多くの薬剤の活性が高いことがわかった（喜久村ら，2014）。このため，本種が近年になって害虫化している原因は，当初疑われていた薬剤感受性の低下が原因ではないと考えられた。被害が顕在化した理由は現在のところ不明であるが，キク圃場において防除を困難なものにしている原因のひとつとして，キクの密植による薬剤の散布むらが指摘されている。本研究では，室内試験で殺虫効果の高かった 4 薬剤の圃場における防除効果を調べるとともに，葉裏への薬液の付着程度が本種の防除効率に及ぼす影響を室内と圃場試験の双方において検証した。

2．方法

1）室内試験：薬剤（イミダクロプリド，エマメクチン安息香酸塩，スピノサド，プロチオホス）がキクの葉の両面に散布された場合（両面散布区）と表のみに散布された場合（表散布区）の，葉裏に生息する幼虫に対する殺虫効果を調べた。

2）圃場試験：通常の散布区（通常散布区，上記 4 薬剤）と，葉裏への薬液の付着程度が高い区（丁寧散布区，イミダクロプリドとエマメクチン）を設け，本種の発生虫数と被害度を，散布前日から 28 日後まで調査し，区間で比較した。

3．結果と考察

1）両面散布区では 4 薬剤すべてが補正死亡率 90%以上と高かったのに対し，表散布区ではイミダクロプリドを除く 3 剤の効果が両面散布区より顕著に劣った。

2）圃場でも 4 薬剤の有効性が認められ（図），通常散布区の寄生虫数は無処理区より少なく，さらに丁寧散布区は 2 剤とも通常散布区より有意に少なかったことから（GLMM, $p<0.01$），散布むらが防除効率に影響していることが示された。被害度は通常散布区と丁寧散布区間で有意差がなかった。